

岩手県生協連、いわて食・農ネットと共同で

“年末に希望した仮設に、ふれあい炊き出し支援を行いました！！”

岩手県消費者団体連絡協議会

岩手県の被災地は仮設店舗の建設が急ピッチですすみ、生活の賑わいが出てきました。被災者は、希望した全員が仮設に入居し、表面的には落ち着いた生活ができています。しかし、寒い冬を迎えて、閉じこもる高齢者が問題になっています。特に今年は、年末以降比較的温暖な被災地の沿岸でも、朝の気温が－3度から－5度になり、プレハブの仮設住宅は大変な寒さに震え上がりました。岩手県は社会福祉協議会に委託して「見守り隊」を組織して「寒さに負けないで」といろいろ企画しています。しかし、高齢男性はなかなか出てきてくれないのが悩みです。そこで、「炊き出しだと何とか参加してくれる」と陸前高田市の仮設から年末の炊き出し依頼があり、12月22日、23日、27日の3日間、70人から180人分の炊き出し支援をおこないました。29日からの年末・年始の炊き出しはいわて生協が受け持って、3,000食の炊き出しを行いました。今回の炊き出しのテーマは「ふれあい&暖かいもの」。前日、盛岡でボランティアが下ごしらえをし、被災地での調理を最小限にして、炊き出し支援に参加した人も一緒に



食べながら被災者の皆さんと懇談するというものです。被災者はこれからの生活に希望を持って生活再建の話をするまでには至っていませんが、漸く、流された物を懐かしんで悔しがる余裕も出てきました。家族で暮らしている方は炊き出しを家に持っていくケースが多いのですが、一人暮らしの方は人恋しく集まって話の輪に加わります。支援に参加した元

看護師や障害児の生活相談をしていた方々がじっくりと話を引き出してくれました。今回は生協連の呼びかけで岩手大学の学生も参加、被災地を自分の目で見て、被災者と交流しました。

仮設入居の被災者は「東京の息子も仙台の娘も来いと言ってくれるが、私の居場所はここ。隣の人と助け合って暮らしている。」「仮設が狭いので、7人家族が3ヶ所に別れて暮らしていて、毎日の生活に精一杯。今後の事を話し合う余裕がない」などいろいろ出されましたが、住み続けたいとの思いは共通です。

寒さについては、仮設入居が夏だったためNGOから配られた布団が薄いものだった事や、急ごしらえの仮設住宅は寒冷地仕様でなかったため、急遽、窓を二重サッシにし、玄関に風除室を作り、1世帯1部屋に限って畳も入れ一応対策はとられました。しかし、壁と床はひんやりと冷たく、エアコンだけでは間に合わずにダンボールやビニールを敷き、電気カーペットやコタツでしのいでいます。NPOによって暖房器具や厚い布団、灯油も配られるなど、たくさんの支援も入っていますが、全体にはいきわたらず難儀が続いています。短期間で大量に必要な事情はあるにしても、中越では、最初から寒冷地仕様で建てています。なんとも歯がゆいことです。被災者は、義捐金や保険金、被災者生活再建支援法で配られた小金はあっても、これからの生活再建を考えるとなかなかお金は思い切って使えないのが実態です。義捐金も全国の皆さんからいっぱいいただいても、あまりに被災者が多いため中越地震の時のようには回りません。雇用保険も1月中旬から3月にかけて終わり、仕事が見つからない働き手が被災地から出て行く事も深刻な問題になっています。このままでは地域が崩壊してしまうので、事業再建支援と住宅再建支援にもっとお金を回してほしいと弁護士会等と作っているネットワークで活動中です。